

図書館通信 — 7 —

1971. 1

発刊1年目を迎えて

赤岩 総雄

「図書館通信」も回を重ねて1周年を迎え、ますます充実してきた感があるのは喜ばしいことである。43、44年度東部図書委員の任に当たり、図書館活動に特に関心を持つことになったが、44年度後半に「図書館通信」の発刊が議せられ、図書館活動の記録、図書館の内容紹介、推せん図書などを主な内容とする方針で、45年1月に第1号が出された。隔月刊で4～8ページの小冊子ながら、過去1年間の内容を読まれた人は十分満足されていることと信じたいものである。1～3号の編集委員のひとりとして、「図書館通信」の成長は嬉しいことである。もちろん紙面はなお充実の必要があるであろうが、それは今年度、さらに続く編集委員の方々の手腕に期待することにしよう。

現代は情報の時代と言われるが、大学の情報の中心は図書館である。にもかかわらず、その利用状況は十分とは言えないようである。ある面から言えば、図書館の図書そのものがその大学の姿であると言ってもよいのであるが、いかに大きな図書館であり、いかに精選された図書が詰まっても、十分に利用されていなければ、学生のいなりっぱな講義室に等しい。図書館と利用者（特に学生）を結ぶ冊子がこの「図書館通信」であり、図書館のPR冊子である。以前にも紹介されたように、1万数千冊に及ぶ指定図書が配架されているが、利用状況は満足すべきものではない。現状では図書館が生かされていないようである。惜しいことである。図書の利用法を身につけることは学生にとって最も重要なことのひとつであることを考えれば、この「図書館通信」は今後ますます重要性を増すであろう。

「図書館通信」は現在までも紙面充実にいろいろの試みがなされたきた。毎号1・2名の先生が専門分野に関する図書を推せんされてきたが、それぞれの専門に携わる先生方の味が文章の端々ににじみ出て、最も興味をそそる読み物となっているように思われる。特にこの「私のすすめたい本」という欄について希望を述べておきたい。

自然科学系の先生から人文・社会科学系の学生に、また逆に人文科学系の先生から自然科学系の学生に、というように必読書を推せんしていただくケースが欲しいものである。

学生時代に受けた講義で記憶に残っているものはほとんどないが、不思議なことに、時々思い出すのは「数学史」「化学史」「物理学史」などの講義である。担当教授が「零の発見」「蠟燭の科学」などの新書・文庫本をわれわれ文科の学生に推せんされたが、ほとんど新刊書のない戦後間もない頃、古本屋でやっと求めて読んだこれらの本の与えた感銘は大きかった。最近はこの洪水に押し流されそのような時代である。その中から新書・文庫本の秀れたものなどもどしどし推せんしていただくとともに、図書館にも数冊ずつ備えるくふうをして欲しいものである。また新書・文庫本なら、毎月数冊購入しても学生にもそれほど負担にならないであろう。しかも十分選択すれば重要な情報が多く得られるであろう。機会をみて全学の先生にアンケートを求め、新書・文庫本の中で専門に関係なく5冊程度の図書を推せんしてもらって、静大ベスト100として発表するとともに、図書館に揃えてみてはどうであろう。

(教養部 助教授 英語)

■ 東部地区図書委員会報告

(第9回) 昭45年10月20日
於本館

- (1) 大学基準協会よりの「大学図書館について」今後改善充実すべき点に関する調査に対して当館が作成した資料の説明があり、これを審議の結果一部修正してこれを了承した。

(2) 短大の図書問題について継続審議を行った。
(第10回) 11月25日

- (1) 維持費についての最終案が決定したので、これを考慮の上、教養図書費の東部学部等の分担について審議した結果、各々適当な分担案を考え次回の合同委員会に諮ることとした。
- (2) 本年度の図書購入費は、1,375,400円(本館分)であり、これによる購入図書は前年同様図書館に留め置き、委員会に於いて全学的視野の下に使用すること、審議の結果、これも前年度と同様、5万円以上の図書を基準に、各部局毎に購入希望リストを作成し、次回に選定を行うこととした。
- (3) 課外教育費による本年度の教養図書購入費は150,700円であり、その配分は人文科学へ6万円、社会科学へ4万円、自然科学へ4万円と決定。

(第11回) 12月11日

図書購入費による購入図書の選定を行った。その系統別金額は図書館40万円、人文科学、社社科学、自然科学共各々30万円、その他75,400円とし、図書館の購入図書は図書館で選定を行うこととした。人文・社会・自然科学・その他については下記の通り選定を行った。

[人文科学]

歴史地理 創刊-昭39年(前年より継続)

La nouvelle revue francaise (NRF)

Reprint. Tome 1-16.

近代中国史料叢刊 31-34.

[社会科学]

London bibliography of social science,

vol. 1-21.

[自然科学]

Mathematische Nachrichten, vol. 21-30.

Review of modern physics, vol. 1-25.

Colowick; Methods on enzymology, vol.

1-16.

[その他]

建築史 昭14-19年 5冊

American journal of orthopsychiatry.

Microfilm, vol. 1-20.

9 rolls of film.

家政学文献集成 続編 全11巻

(第12回) 12月18日

- (1) 教養図書の第2次選定を各学部からの希望図書リストをとりまとめの上行った。
- (2) 昭和46年初めの試験期の夜間開館は例年通り実施したい旨発言があり、これを了承した。

■ 附属図書館維持費検討委員会

(東部)

東部地区図書委員会 合同委員会

昭45年11月17日

於本館

- (1) 本館維持費の東部学部等の分担案をほぼ決めたが、これを基礎として教養図書費の分担を決定した際に維持費の分担も併せて最終決定することにした。
- (2) 教養図書の東部学部等の分担は継続審議とした。
- (3) 指定図書購入費の分担は、10月16日の維持費検討委員会で決っていたが、それについて各学部等の承認が得られた旨の報告が各委員からあった。

11月30日

- (1) 教養図書費の東部学部等の分担方法は前年通り算出し、調整として理学部合計額から減じた分を他の3部局が分担することに決めた。
- (2) 申し合せ事項
○本年度の審議結果(全額)を尊重する。
○維持費・教養図書の東部学部等の分担は併せて維持費検討委員会(東部)において審議する。
- (3) 冬期休館は12月21日～1月7日までとした。
- (4) 図書購入費による購入図書の選定は各学部等のリストを12月9日まで提出した。
- (5) 教養図書の第2次選定は、12月8日に行なうこととした。

■私のすすめたい本

「ガロアの生涯」を推す

坂井昭三

推理小説を読むか、テレビその他で碁将棋ラグビー等を見るか、又は酒を飲むかという生活を送っている私に「私のすすめる本」を書けといわれ、お門違いでしょうと逃げていたのにとうとう書かざるをえない破目におちいった。固辞は認められず余儀なく埋草らしいものでごまかすことにする。最近の本を読んでいないため懐古趣味的になるかと思われるがあしからず。

「大数学者・上」を読み、2人の主人公アーベルとガロアの悲劇的生涯に涙を流したのは大学へ入る前だったと思う。フランス大学院からひどい目にあい、そのためもあって同世代の数学者に殆んど認められないままに世を去ったことは2人共似た境遇といえる。しかしアーベルが（その天才はさておいて）一生を貧困という庶民的な悲劇の連続で終始したのに対し、ガロアの21年足らずの一生は悲劇的というよりも英雄的というものだったように思われる。数年後インフェルトの「神々の愛でし人」によってガロアの死は警察の陰謀によってなされたものだったということを知り一層奮激したものである。インフェルト自身についてもアインシュタインとの共著「物理学はいかに創られたか」をより以前に読んで感銘させられたことを覚えているが、神々の驚愕はより大きなものであった。問題がやさしすぎたがために？試験官とかみあわず2回理工科学校に入学できず、論文は学士院会員に忘却又は紛失され、死の決斗の前夜に書いた遺書の中で自分の論文について、「二三のことを付け加えれば証明は完全となる。もう時間がない。」「以上の定理の正否については重要性的に於いてヤコーピカガウスの意見を聞くよう公開の依頼状を出してほしい。」

といったガロアをもう少し生きさせたかったと嘆じたのは私だけだったろうか。この両著共最近新版が刊行されたことはよろこびにたえない。特にインフェルトの「創作的」な伝記（序文、追記より）は多くの人に感銘を与えるものと思う。

同じく復刊されたものに「近世数学史談」と「数学雑談」がある。「史談」ではガウスとアーベルを主題にして19世紀初期の数学界の様子が活写されている。多少専門的な叙述があり丁寧に読

まなければならぬが、面倒くさい人はとぼして読めばよい。「アーベルモガロアモ処世ニ失敗シタノデアル。時代ヲ超越スルニモ程合ガアッテ二十年三十年の超越ハ危険デアル」等 *esprits* に満ちた書である。「雑談」は「史談」に比して肩がこらない。集合論ですぐに直面する逆理とか、複素数体が数体としては最大であること等がわかり易く解説してある。ただし数学の本であるから流し読みはできないが逆に高木先生独特の *j o k e* が出て笑わせる。

「数学雑談」と同じ傾向であって、もっと初等的なものとしては「数と図形」がある。これは絶版になっていると思うが複刊を望みたいものの一つである。俺の知っていることも書いてあると読者に感じさせることも読み易くさせる理由であろう。とはいっても内容は相当に高度。ただこの本が全部わかったから又はこの中の未解決の問題がとけたと思って（と思うのはその人だけかも知れない）数学を安易に考えることだけはやめてほしい。

最後に最近出たものとして「数学から超数学へ」をすすめる。これはユークリッド以来又はヒルベルト以来の公理的方法に対する一つの終止符となるゲーデルの不完全性定理を解説したものである。大まかにいえば「矛盾のない公理系からは証明できない数学的定理が存在する。」というのが不完全性定理である。この定理で数学者は悲観するにはおよばない等はこの書にゆずるとして、この書からも数学的思考の方法を学んでほしい。

以上純数学書には触れずに書いたらさいわい紙数もつきた。書きもらしたのものもあるがこれでやめる。「一冊ならば何を」と問われればやはり「神々の愛でし人」をすすめたい。

1. インフェルト「ガロアの生涯—神々の愛でし人」日本評論社（旧版とは標題の前後がかわった。）
2. 小堀憲「大数学者」新潮社（旧版の上下にガウス、コーシーが加えられて一冊になった）
3. 高木貞治「近世数学史談」共立出版
4. 高木貞治「数学雑談」共立出版
5. ナーゲル・ニューマン「数学から超数学へ」白楊社
6. ラーデマッヘル・テップリッツ「数と図形」創元社

（理学部・助教授 数学）

文献複写規定について

「静岡大学附属図書館文献複写規程」が、下記の通り新たに定められましたので、今後これに基づいて、複写業務を実施致します。

(趣旨)

第1条 静岡大学附属図書館規則第10条の規定に基づき、この規程を定める。

(文献複写の受託)

第2条 静岡大学附属図書館および分館が文献複写を受託することができるものは次のものとする。

1. 本学の教職員および学生から申込みのあった私費、科学研究費および委任経理金による文献複写

2. 学外者から申込のあった文献複写

(受託の条件)

第3条 前条の文献複写は教育または研究の用に供することを目的とするものでなければならない。

(申込手続)

第4条 文献複写を依頼しようとする者は別紙様式による文献複写申込書を図書館長または分館長に提出し、その承認を得なければならない。(別紙省略)

(文献複写料金)

第5条

1. 前条の承認を得た者は、文献複写料金を前納しなければならない。ただし承認を得た者が国の機関で国費負担の場合に限り延納を認めることができる。

2. 納付した文献複写料金は、いかなる理由があっても返還しない。

3. 文献複写料金は別表の定めるところによる。(補則)

第6条 前条によるもののほか、文献複写料金の取扱いについては別に定める。

附則

この規程は、昭和45年11月1日から施行する。

別表：文献複写料金

種 別	区 分	単 位	学 内	学 外	
マイク ロフイルム 方式によるもの	撮 影 料	基本料	1 件	50円	50円
		ネガフイルム	1 コマ	8	10
		①特殊撮影料	1 コマ	2	2
	② 引 伸 料	A 5 判	1 枚	20	25
		B 5 判	1 枚	30	40
		A 4 判	1 枚	40	50
電子複写式によるもの	複写料	B 4 判 ③	1 枚	60	70
		B 4 判 ③	1 枚	30	35

※① 筆写又は木版等の和紙の古文書、古記録等の撮影の際の加算額。

② リーダープリンターによるものを含む。

③ B4判以下の用紙を使用した場合を含む。

備考

1. 「学内」とは第2条の1の場合をいう。

2. 送料については実費を徴収する。

一実際に複写機を利用するには一

① 複写の対象となる図書

静岡大学附属図書館所蔵の図書に限る。

② 複写の前に………

(イ) 感光紙の枚数計算

先づ複写したい文献の箇所とページ数を調べる。次に示す三種類の感光紙の中から、複写する文献のサイズ(開いた本の左右両ページ)に適する感光紙を選択して、複写に必要な感光紙枚数を出す。

感光紙のサイズ

A 4 判 (362 × 215mm)

B 5 判 (262 × 185mm)

B 4 判 (369 × 262mm)

(ロ) チケット

感光紙は図書館に用意してありますが、現金と引換えに複写機利用者に分けることはできません。利用者は生協の文具コーナーで現金に代るべきチケットを買った上で、図書館カウンター内文献複写係まで複写機利用を申し出て下さい。

チケットの種類(感光紙のサイズ別)

桃色—A 4 判 (10円)

青色—B 5 判 (7円)

緑色—B 4 判 (14円)

(5ページから続く)

ばするようで、妙案となるかどうか分からない。整理系の業務システムを改善することによって、問題を解決しようとしているが、これは計画を練って慎重に行なわねばならない。購入図書の増加、旧制静岡高、西部教養部分室の図書の分類換、また法経短大図書の問題等、諸懸案が山積しているなかで、整理事業の問題が今年は大きくクローズアップされる年になりそうである。慎重にこの問題と取組み、改善案ができれば大胆に実行に移して、懸案を解決したいと思っている。

—デスクサイドで—

整理係 中島由美子

大学で図書館学なるものを専攻し、司書なる実務について早や3ケ年、毎日山積された洋書を辞書や様々のツールと首っぴきで片端から処理していく日常性の中で、私は、末だに、この職業にふっきれないものを感じる。

大学時代のある皮肉屋の友人は、こんなことを言っていた—“思うに、図書館学とは、米国はCIAのスパイ活動から生まれた極めて合理主義的な体験的現象の組織的体系化であって、所詮は補助科学、総合科学ではない。—確かに、一面をついたとらえ方である。だが、この補助科学ということばの中に、私は図書館人の宿命を見る様で嫌なのである。

社会文明を直接的な働きで造り上げていく人々—科学者、政治家などを一次的職能人とするならば、図書館人は、文明の初歩的仲介者である情報資料を通して、利用者に奉仕する二次的職能人ではないか。大体“奉仕”という言葉すらM. ウェーバー説くところの職業倫理の輸入翻訳的臭いがして、今日の日本では、如何にサービス・サービスと図書館の窓口に錦旗をふりかざしてみたところで、どれ程真に、これを体現できるのか疑問で仕方がない。西欧の伝統的なキリスト教精神に根ざしたサービスは、我々日本人には、高々、日常生活の中では、かなりの犠牲を伴った意味にしか解せない筈である。

ごく些細な事柄だが、ある論文の執筆者が、やっとの思いで原稿を書き上げても、引用文献リストの作成という非常に煩雑な仕事が残されることが多々ある。しかも、この煩雑さの余波は、編集者に迄およぶ。そこで手に余るとなると、図書館の便利さを知っている執筆者なら、原稿メ切で一刻を争う事だからと、かなり難解なレファレンスでしかもこれをクウィックに要求してくる。こんなところにも我々のサービスは存在している。確かに、ここで我々は単に印刷され出版された資料を読者に提供するだけでなく、出版以前の段階で、既にそのアシスタントとして、編集や出版業務の世界にサービスしているわけである。だが、この種の仕事も我々の日常業務と同様、様々の細い書誌的知識とテクニックを必要とする割には、実に煩雑で、表立って認められることは少い。所詮

は補助科学である。

サービスとは、おおよそ、この様なものなのであろうか。社会的には、サービスを基本的精神とした縁の下の力持ちでありながら、一個人としてはかなりの知識を要求される職能人として、我々は、このサービスという職業倫理をどの様に解釈したらよいか、私なりの答を求め続けるつもりである。

書物は初歩的であります、いちばん大切な文明の仲介者であります。そして、それにちかぎ易い様にすることが、世界でいちばん魅力ある職業なのです。これらの仕事の中で、時間の浪費や煩わしさや困難の多いことは、余りに大きすぎます。私たち図書館人は、報酬も少く、認められもせず、そして重すぎる荷物を負いすぎているのかもしれませんが、私たちはそこに、真の価値を認めているのであります。”

—F. M. ガードナー—

スポットライト —整理係について—

図書館の中で、利用者と接触が少なく、一番知られていない部門として整理係がある。図書の背のラベルに記入された数字や記号の決定（分類）や目録カードの作成等は整理係が主とする業務である。利用者が図書を採し易いように、図書を体系的に書架に配列し、また著者名や書名による目録等をつくっている。この作業をするために、N. D. C（日本十進分類法）やN. C. R（日本目録規則）を用いる。

昨今、整理の遅れについて苦情が持ち込まれている。私達としても早く処理はしたいのであるが、物を右から左へやるように安易に作業はできない。処理を間違えれば、図書が検索できなくなるからである。整理には、業務に伴うものとして、活字記入のためのタイピングやカード印刷等の機械的な作業もあり、それが能率的に処理できないでいる。図書は迅速に利用者の手に渡すようにするために、最近、業務の合理化、簡素化が問題となっている。しかし分類・目録作業は知的能力と経験が要求されるので、合理化できない部分である。そこで、機械的な仕事であるタイピングや印刷を簡素化して、その余った時間を他作業へ回わそうという試みの一案として、それらの外注を考えている。しかし、それは他大学の経験でも功罪なか
(4 ページへ続く)

